

## 資料「1968年以後の共産党——革命と改良の間で」

「人文研アカデミー 連続セミナー 〈68年5月〉と私たち」2018年5月10日

小泉義之

### 東大図書館攻防戦（1968年）

『朝日新聞』「学生同士が乱闘——共闘会議、図書館封鎖できず」1968年11月13日朝刊

十二日夜、全学封鎖をめざす全学共闘会議（反代々木系）などの学生たちと、封鎖に反対する東大闘争勝利行動委員会（代々木系）などの学生たちが、総合図書館前で約三十分間角材などではげしく乱闘、約四十人の負傷者を出した。封鎖はされなかったものの、教官首脳陣はほとんど姿をみせず、大学当局は、新体制となっても收拾への手がかりをつかめないまま、ついに学生と学生による流血事件という最悪の事態となった。／反代々木系の学生約千人は、同日午後四時ごろから安田講堂内で「全学封鎖貫徹総決起集会」を開き、闘争態勢強化、全学バリケード封鎖の方針を再確認した。同六時半ごろ、工学部一号館を封鎖した。これに対し、代々木系も学生約三百人が他大学の学生の応援を得て、ヘルメットで武装、夕方から図書館前にすわり込み、早くから流れていた反代々木系の図書館封鎖に備え「実力阻止集会」を開いた。／午後八時半すぎ、反代々木系は代々木系学生に角材をふるってなぐり込んだ。代々木系も用意の角材で抵抗、乱闘となった。牛乳ビンや発煙筒も飛び、叫び声やなぐりあう音が、構内横の本郷通りまで響いた。

東大闘争全学共闘会議編『砦の上にながれらの世界を』（亜紀書房、1969年）310頁

11月11日、全共闘は、当局との交渉を打ち切り、全学封鎖に邁進するという方針を決定した。全学封鎖の突破口として、総合図書館封鎖が設定された。総合図書館は、東大の研究教育機能の上できわめて重要な位置を占めており、そこは、闘争の進展とは無縁に、ただひたすら「学問」にはげむ点取虫の最大の巣窟となっていた。既成の東大を根底から批判して運動を進める全共闘は、このような状態をいつまでも許しておくわけにはいかなかった。

『赤旗』「全学封鎖」の策動阻止——正当防衛権を行使、トロツキストを撃退」1968年11月13日

「全学封鎖阻止」「東大の真の民主化を勝ち取ろう」「統一と団結」などのプラカードをかかげた学生・院生は東大構内をはげしくデモした後、総合図書館前にすわりこみ、図書館封鎖を阻止する闘争をつげました。／図書館前には、図書館を利用していた法学部学生など十数人が、トロツキスト学生らの図書館封鎖予告に憤激し、すわりこみをおこなっていましたが、東大闘争勝利行動委員会と東大大学院生協議会のデモに拍手を送り、そのすわりこみに合流しました。／あくまで「全学封鎖」を強行しようとするトロツキスト学生は〔……〕午後七時三十分、午後八時三十分の二回にわたって角材などのほか毒物入りの消火器などをもっておそいかかってきました。／しかし統一代表団準備会議を支持する多くの学生たちは、敢然としてこれに立ち向かい、ついにトロツキストの襲撃をはねかえし、「全学封鎖」の策謀に痛撃をあたえ、阻止しました。

### 「正当防衛」論

（共産党系）全学連第19回大会基調報告（1968年7月）：東京大学全学大学院生協議会・東大闘争記録刊行委員会編『東大変革への闘い』（労働旬報社、1969年）148頁

「反全学連諸派の不正選挙、執行部への不当な居すわり、自治会の暴力的占拠、第二自治会のデッチ上げなどの卑劣な策動を軽視することなく、あえてかれらが暴力的手段に訴えるならばこれを粉碎」する。「彼らの暴力に屈して、逃げまわったり、主張をまげたり、あるいは逆上したりする傾向」を払拭し、「彼らがあくまで暴力をもって攻撃しかけてくるならば、学友の力を結集し、正当防衛権を断固として行使し、実

力をもって粉碎する」。

『赤旗』「主張」「正当防衛権にもとづく断固たる行動を——法政大学での力づよい経験に学ぼう」1968年9月13日

『赤旗』「主張」「学園からの暴力一掃を——トロツキストの武装解除こそ先決」1968年11月14日

12日（68年11月）夜、東大で、統一代表団を支持する学生が決起し、みずからも自衛体制をとって、トロツキスト暴力集団の襲撃を撃退し、かれらの「全学封鎖」という暴挙を断固阻止したことは、いま大きな反響を呼んでいます。

### 安保闘争と沖縄闘争（1970 - 1971年）

「討論：沖縄非軍事化構想と国会」における不破哲三の発言（『世界』1971年12月号、58頁）

国会で自民党が多数を取っている状態では、われわれは積極的なことをやる多数派をなかなかつくりえない。彼らの多数が国民の意思に反して無茶なことをやるのを、内外呼応して押えることはできても、別の方向に動かせることは、至難のことです。[……] いまのような状況で、自民党が多数でやろうとしているときに、これを阻止する道は、主権者である国民の介入以外にはない。／院外行動はこういう重大な問題に対して、国会外にある主権を持っている国民、[沖縄返還]協定の内容に賛成できない国民が、その意思を国会に反映するさまざまな行動をとるわけで、それが国会の中での活動と相まって、力になるわけです。

労働者教育協会編『君の沖縄』（学習の友社、1971年）17頁

「安保繁栄」は、ぼくたち本土の労働者の血と汗がしぼりとられた結果であることはまちがいない。／だがそれだけではない。／ぼくたちの血と汗よりももっと多くの沖縄県民の血と涙、ベトナム人民の血が流されたことのうえに、それはなりたってきた。

同、149頁

考えてもみてくれ。沖縄を自分のこととして考え、とらえることができ、そのためにたたかう労働者の若い群像が、日本中の職場に、地域にみちあふれたときのことを。／支配者は、ふるえあがるだろう。あの六〇年安保のデモのうずをみて、財界人の一人がこれは革命じゃ」と叫んで食事中にスプーンを落としたように。そして、七一年の統一地方選挙の結果をみて、「日本の未来がわからなくなった」と叫んだ新日鉄の稲山社長のように。支配者はつよそうにみえるけど、公害・物価・「合理化」への怒りと沖縄問題が合流することを、おそれおののいているのだ。

### 新旧左翼の「一致」

広谷俊二『学生運動入門』（日本青年出版社、1971年）219 - 221頁

[トロツキスト各派は] 反帝、すなわち帝国主義に反対するとともに、反スタ、すなわちスターリニストに反対するというのである。かれらのいうスターリニストとは、社会主義諸国の政府と各国の共産党をさしている。したがって、共産党にとっては、トロツキストは、自己を帝国主義と同列において敵視し、打倒しようとしている勢力であるから、統一してたたかうべき対象とみなすことはできない。しかし大衆運動のなかでは、相互に敵対視する党派であっても、いっしょにやらないわけにはいかない。トロツキストがいるからといって、共産党員が学生自治会から出てゆくわけにはいかないし、トロツキストだからといって、それだけの理由で学生自治会から除名することもできない。役員選挙で双方が立候補してあらそって、結果として、例えば委員長に民青同盟員、副委員長に「革マル派」なり「中核派」なりが選出されたとすれば、一緒に仕事をしないわけにはいかない。[……] 彼ら[トロツキスト]を、学生統一戦線にくわえることができないというのは、彼らが反共主義的政治方針をもっているからではなく、民主主義をじゅ

うりんし、大衆組織を分裂させる集団だからである。それでは、彼らが民主主義を尊重し、内ゲバをいっさいやめたら、統一にくわえるべきであろうか。しかり。

### 新日和見主義批判（1972年）

日本共産党中央委員会出版局『新日和見主義批判』（1973年）1頁

一九七〇年代にはいって、内外情勢のきわめてはげしい変動と諸闘争の急激な進展にともなう小ブルジョアの動揺や混迷の影響のもとで、アメリカ帝国主義の侵略性の軽視、「日本軍国主義主敵論」、「大衆闘争唯一論」などを内容とするあたらしい型の日和見主義の潮流が発生しました。／これとむすびについて若干の大衆団体のグループなどに分派主義的、非組織的活動があらわれましたが、党はこうした策動にたいして断固としてまた機敏に思想的、組織的闘争をおこない、これを粉碎しました。

日本共産党中央委員会出版局『青年学生運動と日本共産党』（1973年）

「闘争戦術、闘争形態、闘争方針」に対する「トロツキストらの影響」を払拭しなければならない（100頁）。それまでの正当防衛権論に基づく対抗 - 暴力を放棄して、「暴力を断つための有効な一闘争形態として法的手段をも活用すること」へ方針を転換しなければならない（108頁）。「現在の学生運動の大きな弱点の一つは、学生の先進部分だけの運動におちいる傾向である。学生運動を、学生の共通の要求の実現をめざし、真に広範な学生の意思にもとづく圧倒的多数の学生が参加する運動に発展させることが、いま強く求められている」（88頁）。

川上徹・大窪一志『素描・1960年代』（同時代社、2007年）（大窪執筆箇所）

そうした措置が一方的におこなわれたのちに、中央委員会書記局の名前で、東大の全全員が召集された。農学部の大教室で夜間おこなわれた会議では、書記局から東大細胞に対する一方的な批判がおこなわれ、この極左的偏向は思想的な問題だと断罪された（204頁）。〔……〕当時つけていた僕のノートによると、中央から東大細胞に対する批判の要点は、次の点にあった。ノートからそのまま引用する。／①革命路線と大衆運動路線の混同。大衆の要求に基づき、あくまで要求実現の観点から闘争方向を大衆的に確立していくべき大衆運動路線の原則を踏みはずし、要求の革命性のみを追求していった点。そこから、要求内容自体が、現闘争において、あるいは現支配体制下において、実現不可能なものに発展していった。②永続闘争論的傾向とトロツキストの過小評価。要求の革命的エスカレートの必然的帰結として、客観情勢を見ずに、徹底的に闘い抜く主観的条件の構築のみを強調して、東大闘争の具体的收拾の方向を提起せず、「解決」の見地を放棄した点。そこから、トロツキストと同レベルで革命性を競い合う傾向が生まれ、大衆から孤立していった。その裏には、トロツキストの反革命性の過小評価、さらには彼らの下部を革命勢力と考える誤謬が存在した。／〔……〕僕らはいっさいの意見をいうことができなかった。そして、それを禁じた党中央に、僕らは根本的な不信感を懐いた（218頁）。

### 大衆運動の分立（1970年代）、知識人党員の離反（1970年代 - 1980年代）

- 1970年6月、「部落解放同盟正常化連絡会議」結成。
- 1968年、「全国障害者問題研究会」結成。1976年に、「全国障害者解放運動連絡会議」結成。
- 1974年、「統一戦線促進労働組合懇談会（統一労組懇）」結成。

1979年9月、宮本顕治、都道府県委員長会議での発言

今や、統一戦線結成の妨害者となっている社会党に対する厳しい批判が必要である。社会党の裏切りによって、革新自治体は音を立てて崩壊している。つい最近では東京の例がそれを物語っている。革新統一戦線が結成されれば、保守勢力に大きな打撃を与えることが可能な時期に、社会党の不決断がその妨害となっている。今度の総選挙で、社会党は国民に対する泣き落とし戦術で現議席の防衛に懸命になっている。

我々はこの社会党の弱腰にけりをつけ、「大阪、京都、横浜、そして東京の裏切りを反省せよ」のスローガンで、社会党の姿を国民大衆に大きく印象づける必要がある。社会党を徹底的に叩くことによって、「真の革新は共産党だけ」を全党組織を挙げて訴えよう。

■1977年、宮本顕治、民主集中制・組織論について、イタリア共産党の「無原則性」を批判。これを受けて、不破哲三、ユーロ Kommunismusを導入した田口富久治に対して名指しの批判を開始。最終的に田口富久治は離党。

1977年、田口富久治「先進国革命と前衛党組織論——『民主集中制』の組織原則を中心に」『現代と思想』第29号に対し、関原利一郎（榊利夫、上田耕一郎ら四人共同執筆）「前衛党の組織原則の生命——田口富久治氏の『民主集中制論』の問題点」『赤旗評論特集版』が出され、1978年、田口富久治『先進国革命と多元的社會主義』（大月書店）に対し、1979年、不破哲三「科学的社會主義か多元主義か——〈田口理論〉の批判的研究」『前衛』1979年1月号が出されて、1980年まで田口 - 不破論争が続いた。この文脈で丸山真男批判も。

■1977 - 1978年、『現代と思想』でシンポジウム「スターリン主義の検討」掲載。前後して、反スターリン主義・反民主集中制を名目として共産党中央批判を示唆する一連の書物刊行。これら知識人党員は、1980年代にいたって除名処分、あるいは自ら離党。

藤井一行『社会主義と自由』（青木書店、1976年）、中野徹三・高岡健次郎・藤井一行編者『スターリン問題研究序説』（大月書店、1977年）、藤井一行『民主集中制と党内民主主義』（青木書店、1978年）など

■1983年、『民主文学』に小田実の文書を掲載したことをもって、共産党中央は『民主文学』と『文化評論』編集への介入を強め、文学者党員を離党させていった。

津田孝「『葦牙』批判——その「自主」と「共同」とはなにか」『文化評論』1987年8月号

■1984年、原水爆禁止日本協議会代表理事の吉田嘉清が、社会党系団体との共闘を容認したことをもって共産党中央の介入で解任され、その吉田の本を刊行した日中出版の社員が党規約違反の名目で除名された。この過程で、吉田嘉清を擁護した江口朴郎、古在由重が離党に至った。

吉田嘉清『原水協で何がおこったか』（日中出版、1984年）、柳瀬宣久編著『鮮烈なる体験——出版の自由と日本共産党』（日中出版、1984年）

柳田謙十郎『スターリン主義研究』（日中出版、1983年）、柳田謙十郎『社会主義と自由』（日中出版、1983年）

■1984年に中野徹三が除名されたが、この背景には、札幌唯物論研究会など、知識人党員が結集する研究会の動向に対して共産党中央が警戒していた事情がある。アルチュセール研究を進めていた東京唯物論研究会、民主主義学生同盟（民学同）と関係のあった大阪唯物論研究会唯物論など、地方唯物論研究会を全国统一しようとした動向にも関連がある。これについては、日本語でも経緯を記録した文献はない。

■1985年、第17回党大会に際し、東京大学大学院党組織の一部が、宮本顕治の辞任を要求した。その理由としてあげられたことは、第一に「十年來の停滞」を招いた政治責任、第二に1977年の14回党大会以降、先進国革命路線からの逸脱を引き起こした指導責任、第三に宮本顕治議長に対する個人崇拜的風潮の進行であった。そして、1970年代から1980年代にかけて、社会主義に不利な一連の事件、すなわち、カンボジアでの大虐殺、ポーランド連帯への弾圧、ソ連のアフガン侵攻、野党の右傾化などがあったものの、宮本顕治を中心とする共産党中央の政治責任は免れないと主張した。その代表であった伊里一智は除名処分となった。

伊里一智『気分はコミュニスト——宮本議長の退陣を求めた東大院生の反乱』（日中出版、1986年）。

## 革命と改良の狭間

小島亮の発言、諏訪兼位他著『伽藍が赤かったとき——1970年代を考える』（風媒社、2012年）

だいたい、共産党にみんなが票を入れたのは〔……〕何も前衛党としての共産党を支持したのではなく、新しい市民社会の現実に目を向けて、「いのちとくらしを守る」というスローガンを実現してくれそうだからでした。自民政権が一切見捨ててしまったような弱い人間の立場を守ると多くの人は期待したのです。前衛党による革命などほとんどの人はごめんだと感じてはいなかったでしょうか。新しいタイプの共産党を、みんなが期待して支持をしていました。それに応えるかたちで、共産党も党原則みたくないものを思い切って修正しつつあるなという、期待感あふれる蜜月と言いましょか、自由の空気が一瞬流れ込んだような感覚というのが、1970年代の中後期にあったと思います（57 - 58頁）。

70年代前半から中期に至る「人民戦線」への夢想と期待は、後半の保守の劇的回復、決定的には80年6月22日の日本史上初の衆参同時選挙での自由民主党圧勝によって完璧に逆転するに至る（108頁）。

## 【補遺】

### チリ

日本革命的共産主義者同盟（第四インターナショナル日本支部）中央政治局編『革命的暴力と内部ゲバルトープロレタリア民主主義の創造をめざして』（新時代社、1973年）

「ところが、この事態のなかで予期せぬ収益で大喜びをしている政治勢力がちゃんと存在している。その筆頭所得者は帝国主義支配階級とその政治部であり、とりわけ政治警察にとっては、こんなうれしい贈り物はないのである。」（8）

「喜んでいる勢力はまだある。おこぼれにあずかる人民戦線派、なかでも日本共産党である。／この宮本顕治の党は、チリの反革命軍事クー・デ・ターで大きな打撃を受けるところであった。「社会主義へのアジェンダの道」と「社会主義への宮頭の道」がどんなに似ているかを力説して、彼らは日本民主連合政府の説得力を高めようとしてきた。もそチリ人民の革命的総武装への道をいそいで採用しないとすれば、つぎに待っているのはクーデターと戦闘的人民の虐殺であることを、われわれ第四インターナショナルがいかにくりかえし警告しても、彼らの幻想をさますことはできなかつた。そこに、彼らにとっては降って湧いたようにクーデターが起つた。こんどは彼らは、「アジェンダの道」と「宮頭の道」がどんなに違っているかを強調しなければならなくなつた。苦しい立場に追い込まれたのである。／ところが、チリ反革命とちよつど同じ時に革マル派による連続的テロ、解放派のリンチ・殺人等々が起つた。／宮本顕治の党にとって、こんなにうれしい同時性は、めつたにあるものではない。「アジェンダの敗北は、極左のせいだ！」と叫びたてることが、一挙に容易になつたのである。チリクーデターの真因はMIRである、これがいま共産党が日本国内でもつばらわめきたてている説明である。むろん厚顔無恥でならした宮頭の党とはいえ、こんな説明がもっと事情に明るい人々のあいだでも適用する理屈であるとは思っていない。十月のはじめに開かれたチリ人民連帯の国際集会の席上でわが日本共産党の代表は、MIRの悪口を一言も口にしなかつた。だからこの説明は、とくに国内向けにしつらえたものなのであるが、内ゲバにたいする人民の嫌悪をたくみにとらえた「政治的」技術と言えるのである。／こうして宮本顕治は、すくなくとも当面、人民戦線の苦境を救つたと思ひ込んでいる。人民戦線の苦境がほんとうに救われたのかどうかはまだ先に行つてわかることであろう。だがいづれにせよ、内ゲバから予想外のおこぼれにあづかつたものが、反帝反スタの革マル派や中核派が深く憎悪し敵対しているはずの、他ならぬ日本スターリニスト党であつたといふこの事実を忘れるべきではない。」（9-11）

※上記国際会議（9月30日から、ヘルシンキでの「チリ人民連帯国際会議」、40（53?）ヵ国の代表が参加）の日本代表団は、金子満広。

## 「敵の出方」論

安東仁兵衛（あんどう・じんべえ）『日本の社会主義政党』（現代の理論社、1974年）

1958年第7回党大会の綱領論争において、宮本顕治が、「平和革命必然論」を退ける論拠として提示。以後、中国派の「暴力革命必然論」を退ける論拠としても出される（とくに1965年9月30日のインドネシアのクーデターが大きかったと推測される）。ところが、第11回党大会では「敵の出方」なる言葉は出てくるが、平和革命論の強調へ転じている。あくまで政権樹立「後」の、「非合法的な武装反乱に対する合法的な措置」の強調にとどまっている。「この合法的措置による秩序維持の論理がただひとつの「敵の出方」——革命的暴力——論の“証し、とされているかのようである」（140）。

## 福祉国家批判

日本共産党中央委員会出版局『新日和見主義批判』（1973年）

「昨今、独占資本と田中内閣は、一方では職場における専制支配をつよめるとともに他方では、欺まんな「福祉政策」をとこなえて組合幹部との「話し合い」なるものを積極的に推し進め、あらたな労資協調路線の確立に狂奔し、米日支配層と労働者階級との矛盾の激化を緩和しようと策動している。」（121頁）

小泉宏『福祉と貧困の経済論——近代経済学・修正主義批判』（新日本出版社、1973年）

「福祉国家」とは、国家独占資本主義の別名・美名でもある。」（i）

「貧困をなくし、福祉を幻想から現実にかえる着実な変革の道」（iv）

聴濤弘『マルクス主義と福祉国家』（大月書店、2012年）

「しかし問題ははっきりしている。確実に、傾向的にヨーロッパの福祉は劣化していつているという現実である。とくに年金・医療の切り下げはヨーロッパのほとんどの国で起こっている。これはヨーロッパの福祉国家が限界にきているということである。私がなぜこのことにこだわるかといえば、日本にはあまりにもヨーロッパ美化論が多いからである。それだけではなく日本の近未来像がヨーロッパにあるかのようにみやす傾向があるからである。」（101）

「ヨーロッパ諸国では無料で治療を受けられる公立病院の待ち時間は、日本では信じられないほど長い。公立病院が少ないからである。そのため一定の所得のある人は民間の病院に行く。そこでの治療費は高い（後で収入に応じた戻りはあるが）。無料のホームドクター制度（開業医）はヨーロッパのすぐれたところであるが、ホームドクターは基本的には治療はせず、治療を必要とみやす患者を一般病院に紹介する。その一般病院（公立・民間含めて）が、そのような事情であるため医療費はかなりかかるのが現状である。日本にある個人開業医の制度は、日本の歴史的・文化的伝統にもとづいて発展してきたものであり、大いに守っていかなければならない。それと患者が直接利用できる病院が多数存在する現行の日本の医療システムはいい制度であり、なんでもヨーロッパが優れているわけではない。」（101-102）

## 1970年代日本共産党論

村岡到『スターリン主義批判の現段階』（稲妻社、1980年）

「いわゆる新左翼の世界では深く考えることもなく、戦闘的闘争にたいする敵対者ということで“日共批判、は常識的前提とされている。「反革命」「日和見主義」「議会主義」「愛国主義」「改良主義」「スターリン主義」などいくつかの常套的レッテルをおうむのようになりかえすだけで批判になっていると彼らは錯覚している。ちょうどこの対極をなして、日本共産党は新左翼を「トロツキスト」「極左暴力集団」「敵の手先」とレッテルはりして事足りりとしている。／六〇年安保闘争から数えてもすでに二〇年経っている。この間、日本共産党は四万人から四〇万人に党員を十倍増させ、新左翼は七花八裂どころではなく、消長もあったが、ともかく消え失せてはいない。“反日共、を心情的支えにしている活動家の層はけっし

て無視できない社会的勢力をなしている。つまり、それぞれの存在の物質的基礎があるということを意味している。この現実を直視すれば、安易なレッテルはりによる批判ならざる非難と罵倒の応酬によっては、対立と憎悪が増幅するだけで、たがいに相手の存在基盤を与えあっているにすぎないことが理解できる。克服されるべきは、このような不毛な対立と憎悪の状況なのである。／私たちは次のことをはっきりと認識しなければならない。四万人から四〇万人に増えた日本共産党の党員は日本の変革と革命をねがい、その実現のために前衛党が必要なことを自覚し、その担い手として生き、活動している人びとである。こういって新左翼の世界からは猛然とした反発がすぐに起こるにちがいない。三里塚闘争に敵対し、全共闘のバリケードにゲバ棒でなぐりこんできた「日共民青」をどう考えるのか、反革命いがないの何物でもない、という声がきこえる。もちろん、戦闘的闘争にたいするこのような敵対は誤っているし、その武装した敵対にたいして自衛・反撃する権利は正当である、と私たちは考える。この点では、私たちは日本共産党の今日の路線と実践にきびしく対立する。だが、もっと重要なことは、このような場面における対立を、革命と反革命、絶対的正義と絶対的悪との非和解的敵対と考えてはならないということである。国家権力や右翼反革命による敵対とはちがう。警官であろうが、右翼であろうが、日共であろうが、なぐられたことに 변りない、というのはマルクス主義ではない。このような直接的事実の背後にある根本的原因をさぐりだすことが重要なのであり、憎悪は何の役にも立たない。理性的認識こそが重要なのである。／いま一つ注意すべき要点は、日本共産党はけっして一枚岩の組織ではないことである。日本共産党を批判するほとんどの論者がこの点を理解していないが、宮本・不破路線が上から下まで全一的につらぬかれているわけではない。最近の例を示せば、なぜ国鉄に統一労組懇ができないのか。統一労組懇づくりは、二月の第一五回大会で強調された、日本共産党の今日の労働運動の基軸的大路線である。にもかかわらず、国鉄の日本共産党員は党中央の指導をはねのけて国鉄では統一労組懇をつくらないと決定したといわれている。また、中西五洲全日労委員長は、当初、統一労組懇とセットにして大々的に提起されたナショナルセンターづくりに反対している。指名解雇攻撃と闘う沖電気の争議団の闘い方をめぐって東京争議団はなぜ、新左翼の活動家を排除するのではなく共闘の傾向を示すのか。これら一連の動きは、明らかに労働運動の戦線には宮本・不破路線にはすぐには従わない「自立的傾向」が存在することを物語っている。／また、イデオロギー戦線では、周知の不破・田口論争につづいて、『民主集中制と党内民主主義』（青木書店）を書いた藤井一行が批判され、つい最近では『マルクス主義の現代的探求』（同）の著者中野徹三が批判されはじめた。この六月には富山県の県会議員の除名問題が起きた。これらのいわゆるユーロコミュニズム的傾向がどの程度の広がりをもっているのか定かではないが、党中央に批判的な部分がお相当の範囲で存在しているのは事実である。しかも、これらの傾向は、党中央の硬直したセクト主義的体質にくらべれば、より理論的であり、柔軟である。／この点からも、私たちの日本共産党への批判は、徹底して内在的であらねばならない。」(3-5)

## 1968年論の構図

桂秀実『1968年』（ちくま新書、2006年）

「これら六八年の課題は「受動的」かつ「反革命的」に実現された。その実現された現在の状況が、左右がともに信奉するところの、「リベラリズム」という呼称で言いあらわされるものである。その場合、リベラリズムとは新自由主義から社会民主主義的リベラル左派（日本では「戦後民主主義」とも言われる）までを含むため、リベラリズムが自明と化した六八年以降の世界は、「六八年」の真の問題を問うことを不可能にしたと言うべきだろう。本書は、何度もこの問題に立ち返るはずである。」(16)

「小熊と道場がともに高く評価するところの、小田実らがベ平連運動のなかで見出したという「加害者の思想」、すなわち、日米安保体制下の日本はヴェトナム戦争に加担しているという視点は、それを徹底して

いけば、日本近代のアジア侵略の歴史性を問わざるをえない。それは、三菱重工ビル等への爆弾テロを敢行した、後の「東アジア反日武装戦線」グループのような「反日」思想に行き着きさえする。「加害者の思想」は、市民的反戦平和主義や非暴力直接行動に収めておくことができないのである。」(80)

「七〇年以降に新左翼の課題として登場したマイノリティ運動が、今やほとんどすべて政権担当者によって受動的に採用されている」(265)

「七・七を誘発することになる日本の六八年は、「市民社会の成熟」ではなく、今や端緒についた「ポスト市民社会」というべき事態にこそ着目していた。だからこそ、「平和共存」ではなく、グラムシ主義を放棄してでもレーニン主義的武装路線へと接近していったものと考えられる。[……] ケインズの福祉主義が市民社会成熟のメルクマールであるとして、日本において、それが実質化されたのは、むしろ七〇年代以降だというのが通説である。その実質化については、長洲一二や美濃部亮吉をはじめとする「革新知事」の果たした役割は無視できない。それは、構造改革理論の現実化であった。しかし、日本の新左翼は構造改革派への批判をとおして、あらかじめ、それを斥けていた。」(283-284)

## 結語

エンツォ・トラヴェルソ『左翼のメランコリー——隠された伝統の力 一九世紀～二一世紀』(宇京頼三訳、法政大学出版社、2018年) : Enzo Traverso, *Mélancolie de gauche — la force d'une tradition cachée (XIXe-XXIe)*, Découverte, 2016

「ラテンアメリカでは、革命は血まみれの敗北だった。西ヨーロッパでは、革命は決して起こらなかった。」(133)

「敗れて武器を置かざるを得ない人民の苦悩が問題なのである。」(237)

「この敗北のメランコリーは今日、遍在しているが、また同時に、犠牲者にしか席を与えない公的な記憶によって「検閲され」、隠蔽されている。革命は、一九世紀と二〇世紀、即ち、ジェノサイドの犠牲者の喪を唯一の遺産とする炎と血の時代のアルカイズムとして現われる。そこから生じたメランコリーは非政治化され、麻痺した順応主義的なものである。それは、反抗を引き起こすどころか、抑えようとする公的な記念儀式に示されている。本書で問題のメランコリーは、犠牲者を哀れむのではなく、救済しようとする文化、奴隷を同情の対象としてではなく、反抗する主体と見る文化のメランコリーである。／リベラルな民主主義と市場経済を世界の自然な秩序と想定し、二〇世紀のユートピアを指弾する現在の規範的言説は、左翼のメランコリーにはいかなる席も与えない。この言説は左翼のメランコリーをただ単に罪深いものと見なし、過去の体制破壊のアンガー・ジュマンへの愛着は否認を要求するだけであり、それは非難にしか値しないというのである。しかしまた、支配的言説の傍らに、抑圧され、締め出されたメランコリーの自己検閲も存在する。長らく、それを認めることは、弱さとか諦めを示すものだった。[……] まず左翼自身によって抑圧され、次いで「ポストイデオロギー的」復古調の現代に指弾されてなお、この反逆のメランコリーはまだ発見すべきものであり、認知される必要があるのだ。[……] 革命的経験が世代から世代へと伝わるのは、敗北によってなのである。」(238-239)